

# 話す意欲を伸ばす高等学校外国語（英語）の授業づくり

北村 わかな<sup>1</sup>

生徒が世界に通じる英語を話すにはどうしたらよいただろうか。本研究ではリーダーシップとコミュニケーションから話す意欲を向上させる効果的な指導法を探究する。小学生との異年齢外国語交流を試み、また学校教育との関わりについても考察する。ふれ合いから学び合い、そして地域と共創する学校づくりへ。持続可能な社会の共生を目指し、生徒の社会化と自立化を図る。

## はじめに

平成 25 年度入学生より実施される高等学校学習指導要領、外国語科では自己と異なるものを理解する広い視野や国際感覚・国際協調の精神を備えた人材の育成につながるコミュニケーション能力を養うことをねらいとし、グローバル化や多様な価値観をもつ人々と共存する社会に対応する人材の育成が期待されている。他者と関わり相互交流、相互啓発していくコミュニケーションに意欲は欠かせない。これまでの授業実践で、意欲の出ない時の生徒の気持ちを耳にする時があり、「話す意欲」が自分の課題の一つであった。意欲的でない要素として英語が必要な場面が少ないこと、実践のない「練習」になっていたことが考えられる。そこで、グループダイナミクスにおけるリーダーシップ、「共通の目的のために自分や他者を関わらせ、役割を果たす力」を活用して、実践的なコミュニケーションを図ることで話す意欲が向上すると考えた。本研究は授業改善として、「リーダーシップ」と「コミュニケーション」から話す意欲についての効果的な指導法を探究し、学校教育との関わりについて考察する。

## 1 社会的背景

中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成 20 年 1 月）によると、社会の変化、グローバル化、子どもの現状を受け、これから求められる人材とは自己と対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、積極的な「開かれた個」であることが求められると述べている。学習指導要領の改訂に伴い、挙げられているものとして、①体験活動により他者、社会、自然、環境との関わりの中で共に生きることで自分に自信をもたせること、②親や教師以外

の地域の人や異年齢の子どもたちとの交流を図ること、③社会生活を送る上で最低限の規範意識を確実に身に付けることがある。高等学校教育に関しては、①社会において自立的に生きるために必要な力を育むこと、②進学・就職等の進路を問わず、生徒の学習意欲を高め、学力水準を確保すること、③家庭や地域・企業との連携・協力を進める重要性、④知識・技能を素材に考えたり、実践しようとするきっかけを与えることが求められている。

## 2 意欲に関する調査結果

（財）日本青少年研究所が行った「高校生学習意識と日常生活調査報告書 日本・アメリカ・中国の3ヶ国の比較」（2005）によると、日本の高校生は「物事に積極的に取り組む方だ」「自分の欲望をコントロールする方だ」「よく勉強する方だ」の自己評価が他国に比べ最も低い。さらに、生活意識として「暮らしていける収入があればのんびりと暮らしていきたい」「偉くなりたくない」など、意欲がないことを基盤としている回答が見られた（2007）。経済開発協力機構

（OECD）加盟 25 カ国対象に行われた 15 歳の意識調査によると、日本の子どもが 29.8%と、加盟国中最も多く「孤独を感じる」と答えた（2003）。将来の仕事について「非熟練労働への従事」と回答した割合は日本が参加国中最も高い 50.3%と、最も向上心が低いことを示した（2000）。また、国立教育政策研究所の平成 17 年度高等学校学習状況調査質問紙の結果によると、外国人が英語で話しかけたら英語で受け答えをする生徒は 2 割にとどまり、英語でコミュニケーションをとろうとしない意思を示す回答も見られた。

社会の変化や子どもをとりまく様々な状況の変化から、自己の能力や適性への自信のなさ、将来への不安感が現れており、他者と関わっていく態度や社会で求められるコミュニケーション能力についての理解が高校生にはあまり進んでいない状況が続いている。（社）日本経済団体連合会が行った「新卒採用に関するアンケート調査結果」（平成 22 年 4 月）において、企業が採用選考にあたって特に重視した点として、コミュニ

1 神奈川県立岸根高等学校

研究分野（授業改善推進研究 外国語（英語））

ケーション能力 (81.6%)、主体性 (60.6%)、協調性 (50.3%) を上位トップ3に挙げていることから、対人関係を育む力と意欲はますます重要視されている現状がある。

### 3 リーダーシップ

Kurt Lewin により提唱される、グループダイナミックスは集団及びその成員の行動に関する一般的法則を明らかにしようとする社会学である。人々の集まりの中の心理学的諸関係により相互依存的関係が保持される一つの力動全体を Lewin は「集団」と定義した (狩野 1982, 1991)。行動は場面の特性と人の特性の両者の力動性によって規定されるものとし、集団と個、場面 (行動的環境) を相互的な関係と捉えるものである。リーダーシップはグループダイナミックスにおける一研究領域である。彼は教育との関連でもリーダーシップの有用性について触れ、動機づくり、役割と責任感、民主的価値観、個人の社会化を挙げている。

Cartwright & Zander (1953) はリーダーシップを集団における他者への能動的働きかけと意味付けし、「集団機能」を集団がその望ましい状態に到達することに役立つ集団成員すべての活動と捉え、集団機能はリーダーシップ機能と同意義であると述べている。オハイオ大学研究、ミシガン大学社会行動研究所などをはじめ、より良い集団づくりのためのリーダーシップの研究が世界各地で行われている。現代ではリーダーシップを特定の個人をその性格・特性から意図的に育てるのではなく、集団内の機能、つまり集団における社会行動そのものと位置付けている (狩野 1985)。それは集団の目標達成に向けた他人に影響を及ぼす過程と言える。本研究ではリーダーシップをウィスコンシン大学の提唱する、共通の目的のために自分や他者を関わらせ、役割を果たす力とする。三隅 (1982) はリーダーシップの対象が成人や子どもにも適用可能であることが望ましく、リーダーシップ論が認知論、学習論、動機論などと結びついていない点を指摘しているが、現代ではリーダーシップが様々な分野で応用されていることから、幅広い年代での適用が可能な力となっている。

### 4 学習指導要領と英語

新高等学校学習指導要領は平成 21 年 3 月に改訂、平成 25 年度入学生より実施される。平成 20 年 1 月の中央教育審議会の答申によると、中学校での学習の基礎の上で、コミュニケーションの中で自らの考えなどについてまとまりのある発信ができることを目指し、四つの技能 (聞く・読む・話す・書く) の統合を図ることが述べられている。科目の構成や内容等の改善がなされ、例えば、英語の共通必修履修科目、コミュニケーション英語 I の目標は「英語を通じて、積極的にコミ

ュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う」であるが、コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成にも資する題材や内容を選択的に取り上げ、体系立てて扱うもの、としている。

新小学校学習指導要領は平成 20 年 3 月 28 日に改訂された。平成 23 年度より小学校 5・6 学年で外国語活動が新設、年間 35 単位時間が確保、実施されている。原則英語を取り扱うこととし、実際のコミュニケーションの体験からコミュニケーションを図ろうとする態度を育み、中・高等学校の外国語学習につなげるものとする。外国語活動の目標はコミュニケーション能力の素地を養うため、外国語を通じて①言語や文化について体験的に理解を深めること、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること、③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることとしている。

国の学習指導要領を踏まえた上で、横浜市教育委員会は市立学校への取組みの方向や特色を示した横浜版学習指導要領の総則を平成 20 年 2 月に、教科等編を翌 21 年 3 月に公表した。外国語科に関しては国の小学校学習指導要領の改訂に伴い、同委員会が先駆けて横浜国際コミュニケーション活動 (Yokohama International Communication Activities、通称 YICA) を創設し、横浜にふさわしい語学教育として小学 1 年より外国語活動を取り入れている。平成 21 年度より全校実施、22 年度より完全実施されている。横浜市では小学校で 6 年間英語に触れることで、積極的に自己表現をし、他者を理解しようとする児童の育成を期待している。中学校ではこの素地と、中学校学習指導要領外国語科の目標を踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きを意識した言語活動を行うことを挙げ、9 年間で培ったコミュニケーション能力の基礎を生かして日本にきた外国人に積極的にコミュニケーションを図ったり、地域の外国人居住者と日常的に交流しようとしたりする生徒を育てることを掲げている。

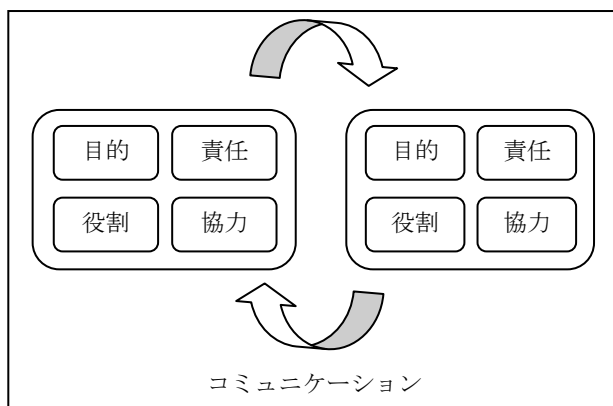
YICA はまた、「豊かな心の育成」、「コミュニケーション能力の育成」、「国語力及び学習の基盤的能力の育成」、「情報社会を生き抜く能力の育成」の四つを重点課題として挙げ、解決に向け取り組んでいる。中でも「豊かな心の育成」は、相手の考えや思いを受け入れた後に自分の考えを伝える等、相手を尊重する態度を意識することが例示されており、また「コミュニケーション能力の育成」では、協力して取り組む大切さや喜びに気付かせること、やりとりによる友人や自分のよさを再認識させること、相手との円滑な関係を築く技術を養うこと等が言及されている。

小学校外国語活動ではコミュニケーション能力の素地づくりのために、①言葉への自覚、②コミュニケー

ションへの積極的な態度の習得、③聞く力の育成、の三つの体験が外国語を通じて行うことが求められている。一方、高等学校ではコミュニケーション能力の育成が、学習と使用によって達成することが求められている。各科目で使われる言語は、常に具体的な場面で具体的な働きを果たすために使用され、言葉の意味はその場の状況や前後の文脈によって決まるため、生徒の発達段階や興味・関心に即して、身近な暮らしや社会に関わる題材を取り上げる配慮が必要とされている。

## 5 研究内容

コミュニケーション能力の育成を目指す授業実践において、「話す」ことの必要性はますます高まっている。恥ずかしさや緊張、苦手意識、経験不足、実感のなさから、高校生の「話す」ことへの意欲は低い現状がある。日常において英語を使う機会がなく、使わないものを学ぶことへの抵抗感は根強い。よって、授業においてコミュニケーション活動を取り入れても、実践のない話す練習をクラスメートとすることに空虚感があり、話すことの楽しさや学ぶことの意義へ結びつきにくい状況があった。生徒の意欲を上げることなくしてコミュニケーションをとることはできないことを痛感した。そこで、グループダイナミクスにおけるリーダーシップ、「共通の目的のために自分や他者に関わらせ、役割を果たす力」を活用して、話す意欲が向上すると考えた。コミュニケーションをとらせるには、英語が当たり前環境に生徒を置くことが必要であり、人間関係のできていない、普段と異なる集団を作る必要があると考え、外部機関である小学生との外国語交流授業を考案した。横浜市では小学1年より外国語活動を取り入れており、22年度より完全実施している。異文化・異年齢である小学生とコミュニケーションを図り、その楽しさを体感し、話す意欲の向上を目指した。



第1図 リーダーシップとコミュニケーション

リーダーシップにおいて大切な要素として役割・責任・協力・目的が挙げられる。高校生にお兄さん・お姉さんの役割を与えることで自覚をもたせ、活動への意欲を刺激する。弟や妹である小学生に関わることは

活動において協力することを意味する。役割があることで責任が生まれ、高校生は気をつけて行動をすることができる。高校生は小学生にわかるように伝える工夫、小学生が安心して話せるような聴く姿勢が求められ、目の前の実際の相手を意識した適切なコミュニケーションが必要になる。柔軟に状況に対応し、英語で真のコミュニケーションを図ることで両者が活動の目的達成を図る環境になる。小学生は興味・関心が強く、覚えてたのものを即時に使うことができる。また、間違いを恐れず、興味をもって覚えてたの言語を駆使し、活動ができる年代である。一方、高校生は大人に近づいており、間違いを見せたり、自分の能力を見抜かれるのを恐れる年頃で、そのために話せなくなっていると考えられる。英語で即応する活動を体験することで、高校生は小学生から一生懸命に英語を使う姿勢を、小学生は高校生から英語表現の豊かさと奥深さを学ぶことができる考えた。

### (1) 検証

小学生との交流（1時間）と、英語 I の授業（2時間）で話す意欲の変化を検証するように計画した。交流を挟む形で英語 I の授業を実施し、計3時間で意欲を見取る。

小学校外国語活動参加計画

実施期間 平成 23 年 10 月～11 月

対象生徒・児童 高等学校 1 年生

近隣の小学校 5 年生

単元名 体を動かそう

単元目標 体の部分や動作を表す表現を知り、いろいろな動きを楽しむ

### 【活動内容】

高校生と小学生が体を動かす表現を使って動きを共に楽しむことを目的として活動を考えた。児童・生徒混合の4グループの形成により、児童・生徒が即座にペアを組めるように工夫する。

言語材料：skip, run, walk, stretch your arms, stretch your legs, turn around, do sit-ups, do push-ups, do a handstand, walk on a line, stand on one-leg

“Can you~?”を用いたゲスゲームにより、動きの確認としてではなく英語でのコミュニケーションを図る活動を入れ、やりとりの楽しさを実践から体感する。

英語 I 検証計画

実施期間 平成 23 年 10 月～11 月

対象生徒 高等学校 1 年生

使用教科書 LovEng. English Course I

単元名 Lesson 6 Eating Chocolate

単元目標 チョコレートの効能と愛されている  
秘密について理解する

単元名 Lesson 7 Get Over Your Fears!

単元目標 様々な恐怖症について知り、その克服  
法を考える

英語 I の授業 (計 2 回) では、外国語活動の前後で、テーマに沿い、ペアやグループでの会話の活動をする。特に、交流後の授業では小学生と学び合ったコミュニケーションの経験や雰囲気、技術を授業に取り込み、コミュニケーション活動の活発化を図る。

#### 【活動内容】

Lesson 6 ではチョコレートに関する迷信から知られざる効能をペアとグループで話し合い、食べ物への様々な角度からの理解をコミュニケーションで深める。Lesson 7 ではいろいろなドキドキする場面をペアで話し合い、グループで各自の対処法を紹介し合う。題材 (Lesson) の背景はクラス内である程度共有されていることから、知り合いにわかってもらえるよう改めて意識して話そうとする意欲が刺激され、また話されたことに上手く反応して返答しようとする意欲も湧く活動である。

#### 見取り計画

##### ・授業での観察

コミュニケーションをとりながら積極的に伝えようとしている (観点: 関心・意欲・態度)

1 時間目: 相手が迷信や効能を理解できるよう工夫しながら伝えようとする

2 時間目: 相手に伝わるように、体を使い積極的にコミュニケーションをとっている

3 時間目: 場面設定に合う対処法を伝えようとしている

##### ・アンケート

##### ・生徒との会話

## (2) 考察

コミュニケーションを図ることは、聞き手と話し手による生のダイナミックな社会行動である。対話においては話し手の情報を瞬時に判断し応答することが繰り返して行われる。小学生も高校生も、英語を通じてコミュニケーション能力を育む目的は共通であり、両者の交流により期待される効果をいくつか挙げる。

第一に、普段と違う相手とのやりとりがコミュニケーションの実践になる。価値観の違う両者が互いの存在を認め、知識や能力・言葉遣い・ジェスチャー等を確認しつつ効果的に伝え合うことで「話す」ことを体験から覚えることになる。目的を果たすため、あるいは

は何らかの合意を得るためにやりとりをすることは工夫を伴い、そこでコミュニケーションを図ることの意義を体感することができる。

次に、役割を与えることで高校生と小学生の両者が特性を生かし、対等に学ぶことができることが挙げられる。コミュニケーションを図る際、一人ひとりのもつ、共通の目的のために自分と他者を関わらせ、役割を果たす力を活用すると自己完結の「話す」に止まらない双方向の学びが可能になる。学習内容は授業で扱う題材や、学習者の経験、得意・不得意、社会的・非社会的等の特性によりコミュニケーションをとるのが難しい場合も考えられる。高校生と小学生の間の温かいやりとりでお互いが不足を補い、得意な所を高め合う関係で目的を果たすことで、助け合い、励まし合い、そして学び合うことができると考える。

第三に、学習環境及び内容が充実することが挙げられる。高校生は自分達に欠けている外国語学習への意欲とコミュニケーションへの積極的な態度を小学生から学び、話すことの意義を改めて知ることができ、小学生は同級生や先生とは異なる高校生が英語を話すのを見て、その言語表現や使用場面・文脈を知り、コミュニケーションへの態度を学ぶことができる。対面して話すということはメールや電話と違い逃げ場がないため、全身で相手の伝えるメッセージを受け止め、それに応じた返答をすることが必要である。互いの存在が英語学習の環境を作っており、両者の生のやりとりによって別々の授業にはない、使用用途が具体的に有意義な、創造性のある学びになるのである。

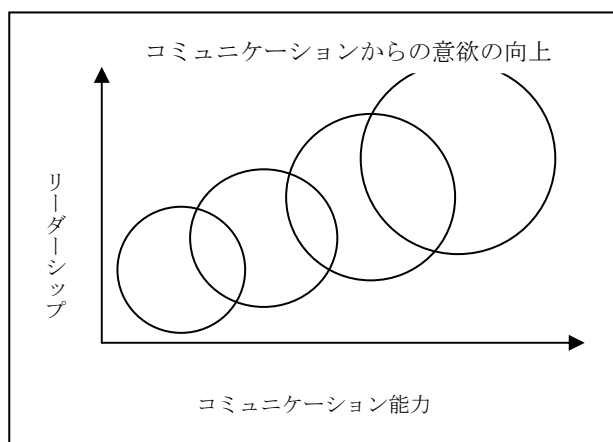
岸根高等学校は近隣の幼稚園、保育園から大学までと、その PTA 等から成る篠原・岸根地区地域交流教育推進会 (通称: すこやかサークル) の中心的役割を担っている。地域で子どもを育てることを目的とし、各団体が様々な交流がある。子どもは親や教師以外の人と体験活動を介し接することで自己理解を育み、相手や地域 (環境) とより良い関係を築くための努力をするようになり、集団における規範意識を形成する。そしてその意識が相互に啓発し、集団に士気が広まり、互いに影響を与えながらより良い集団を作るのである。より良い集団とは意欲が高まっている集団と言える。学校から生徒による生き生きとした大きなエネルギーを地域に発信し、地域に支えてもらう学校づくりは、地域の活性化へとつながる。地域が団結することで生徒が社会に属している意識をもつことができ、社会への希望や将来への意欲が育まれる。コミュニケーション技術を磨くことは社会へとつながっていくことでもある。今やコミュニケーション技術は意欲の向上だけでなく学びの技術、手段ととらえる時代に来ていると言える。

高校生には進学・就職等の進路を問わず、学習意欲を高め、学力水準を確保することが求められている。

小学生との交流により、「話す」ことで自身の英語を顧みてより効果的に話したいと望むことが期待できる。また、体験をきっかけに英語に興味をもち、学習に打ち込むようになることも十分考えられる。相手が変わるたび「話す」体験が増え、話すことのバリエーションや奥深さに生徒が気付くことでさらに学習への動機づけとなるであろう。一方、小学生には「音」からの慣れ親しみからの言語や文化への理解が求められている。身近な高校生による豊かな英語表現を取り入れ、すぐに使うことができ、授業後も様々な場面での使用が考えられ、英語への興味をさらに広げることができる。学力低下が叫ばれている昨今、コミュニケーションを媒介とした「話す」意欲の向上と「話す」活動が生徒の英語そのものへの関心を高め、英語学習への主体的な取組みにつながる。学力向上と大学進学との関わりについてより一層の効果が期待される。

## 6 コミュニケーションとリーダーシップ

現代では自分と異なる他者を理解する機会が少ない。そのために、高校生は異質な他者とのコミュニケーションをとりたがらなくなっており、英語学習本来の目標「コミュニケーションをとろうとする態度」の学びに対して消極的になり、意欲の低い状態を引き起こしている。社会において、広い視野と地球規模的・国際的感覚をもち共生する人材が求められている。それには異文化・異文明の人と直にコミュニケーションを体感するのがコミュニケーションをとる態度の育成に不可欠であり、その場の提供が今回の授業の工夫、異年齢交流により可能になると考える。積極的にコミュニケーションをとることが、相手を理解し、話すことに興味をもち、その言葉の表現や語彙の自主的な学びへとつながるのである。また、話すことが人と人を結びつける有効な行為であることから、人との関わりを築き、互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う「コミュニケーション」の模索を校種に限らず挑戦していく姿勢が必要と考える。



第2図 意欲の高まり

本研究では役割をもたせ、他者と協力し、自身の行動に責任を置くことで、自然な発話が期待でき、その体験が意欲の向上に好影響を与えることを述べてきた。話す意欲が増すことで「話す」ことの行動化へとつながる。小学生と高校生が生き生きと会話がはずむことで、より強いコミュニケーションとリーダーシップが養われるであろうと考える。生徒は英語そのものへの苦手意識や関心の低さから本来の「話す」目的を誤解しているように感じる。小学生とやりとりしたいという気持ちの発現が話す意欲の増す源になる。英語を使う・使ってみたいと思う実践の場を与えることで、普段英語に興味をもてない生徒も夢中になって英語を使おうと頑張ると考えられるが、その「頑張る」力が学習に必要な意欲である。生徒個々がもつ独自の「頑張り」を引き出し、高める支援が今後、教員に望まれる。

### おわりに

実際、日常生活で英語に触れる場面は少ない現状ではあるが、グローバル化が進む中、英語を使いこなす人材が求められていることは確かな事実である。本研究では、役割のある実践から意欲の向上を試みることで、興味をもち、学習に打ち込む姿を追求した。異年齢の交流により、話す意欲の向上だけでなく話すことへの行動化へとつながり、相手を思いやる態度や協力してより良い人間関係を築く姿勢を育むことができ、自身の学力に好影響を与える可能性が高まる。また、意欲をもつことで自身の将来の目標ができ、より人と関わって目標の達成を目指す集団となることが多いと考えられる。このことはまた、今も重要課題として各学校が取り組んでいる不登校や自殺、いじめなどの解決策への効果も期待できる。生徒には普段と異なる集団での学習から、コミュニケーションの最初の一步を今一度確認させ、英語へのさらなる興味へとつなげてもらいたい。

相互理解・異文化理解のために、自己と他者を関わらせ、意欲的に取り組むカークリーダーシップが、より良い集団・社会の一員を作っている。意欲をもたせることは、生徒が自己を発見し、健やかに、輝いて生きることへとつながっている。自分に自信をもち、社会に、世界に羽ばたく人材を育てることが今、求められている。

### 参考文献

- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 2007 「平成 17 年度教育課程実施状況調査 (高等学校) ペーパーテスト調査集計結果及び質問紙調査集計結果」
- 国立教育政策研究所 2010 「先進国における子どもの幸せ 生活と福祉の総合的評価」

- (www.nier.go.jp/UnicefChildReport.pdf (2011. 7. 11 取得))
- (財) 日本青少年研究所 2005 「高校生の学習意識と日常生活調査報告書 日本・アメリカ・中国の3ヶ国の比較」
- (財) 日本青少年研究所 2007 「高校生の意欲に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」  
(http://www1.odn.ne.jp/youth-study/research/2007/gaiyo2.pdf (2011. 5. 19 取得))
- (社) 日本経済団体連合会 2010 「新卒採用 (2010年3月卒業者) に関するアンケート調査結果」  
(http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2010/030kekka.pdf (2011. 7. 11 取得))
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」
- 中央教育審議会 2011 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」
- 日本学術会議 2007 「対外報告 我が国の子どもを元気にする環境づくりのための国家的戦略の確立に向けて」  
(http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-o-20-t39-4.pdf (2011. 7. 11 取得))
- 文部科学省 2010 『高等学校指導要領解説 外国語編・英語編』 開隆堂出版
- 横浜市教育委員会 2009 『横浜版学習指導要領 YICA 外国語科』 (株) ぎょうせい
- 横浜市教育委員会 2009 『横浜版学習指導要領総則編』 (株) ぎょうせい
- University of Wisconsin- Madison “Rubric for leadership course”  
(http://cfli.wisc.edu/cmsfiles/Rubric\_for\_Leadership\_Course.doc (2011. 5. 16 取得))
- Research Center for Group Dynamics, University of Michigan (http://www.rcgd.isr.umich.edu/ (2011. 5. 16 取得))
- Cartwright, D. & Zander, A. 1953 “Group dynamics: Research and theory. Row, Peterson & Co.
- Cartwright, D. & Zander, A. 1959 “Group dynamics: Research and theory.” 三隅二不二・佐々木薫訳 『グループ・ダイナミックス』 誠信書房
- 狩野素朗 1991 「集団構造の解析」 (三隅二不二・木下富雄編 『現代社会心理学の発展Ⅱ』) ナカニシヤ出版 pp. 182-205
- 狩野素朗 1985 『個と集団の社会心理学』 ナカニシヤ出版
- 蜂屋良彦 1991 「集団の課題構造とリーダーシップ」 (三隅二不二・木下富雄編 『現代社会心理学の発展Ⅱ』) ナカニシヤ出版 pp. 206-228
- 三隅二不二 1982 「リーダーシップPM論の研究」 (三